

# ピラミッド・テキスト：翻訳と注解（1）

塚 本 明 廣\*

The Pyramid Texts: A Japanese translation with commentary (1)

TSUKAMOTO Akihiro

## はじめに

本稿は、古代エジプト古王国時代末期、主として第5王朝末から第6王朝時代(紀元前24世紀~22世紀頃)[1]に掛けてサッカラに建造されたウナス王(第5王朝、Wと略記)、テティ王、ペピー一世、メルエンラア王、ネフェルカーラア=ペピ二世(第6王朝、順にT,P,M,Nと略記)の各ピラミッドの内壁に刻まれていた象形文字資料の翻訳と注解である。

## 1 ピラミッド・テキストの発見とその本文および翻訳の出版

エジプトの遺産の発掘と保存に尽力しカイロ博物館の基礎を据えたマリエット(F.Mariette)は、最晩年になってそれまで顧みられなかった小規模ピラミッドに関心を寄せていた。それに示唆されたブルクシュ(H.Brugsch)によって1880年にまずP、Mのピラミッド内部に刻文が発見され、後を継いだマスペロ(G.Maspero)によってW、N、Tのピラミッドにおいて次々に発見されたこれらの資料は、ピラミッド・テキスト(以下、PTと略記)と呼ばれ、早くも1881/1882年にマスペロ自身による最初の活字転写本文と翻訳とが現れ、その後1892年に掛けて全文が訳出された。ところが、5王のPTには明らかに同一出自と見られる並行本文が認められることから、壁面の配列順序によるのではなく、それらの並行行を明示する一覽本文の編集が望まれた。またその間の校訂研究により、マスペロによる本文配列の誤り、読み違いによる誤訂正、古文字学(paleography)上の不正確さ等、いずれも本文とその歴史との理解に直結する不備が指摘され、エジプト学の急速な発展とも相俟って、本文の再検討と新たな出版とが待たれていた。1898年にベルリン王立(当時)博物館エジプト室所蔵の拓本と写真とを託されたゼーテ(K.Sethe)は、それらの期待に応える4巻からなる画期的な校訂本文とその校注とを1908年から1922年に掛けて出版した(SPT、末尾の略号一覽参照)。以来今日に至るまで、ゼーテのこの書はPT研究の基礎資料となっている。本稿の翻訳もこれを底本とする[2]。

PT全文の翻訳は、上述のマスペロによるフランス語訳に続いて幾種類か出版されたものの、今日では入手し難いものが多い[3]。現在なお信頼のおける翻訳として標準的に依拠・引用されるものとしては、ゼーテによるドイツ語訳(一部未完)、フォークナーによる英語訳がある。幸いにこれらは比較的入手し易く、本稿もその恩恵に浴することができた[4]。

\* 佐賀大学文化教育学部日本アジア文化講座

## 2 本研究の意義

このように欧米諸語による全訳は現在までに幾つか出版されているものの、日本語による原典からの直接訳は部分訳に止まり[5]、今日に至るまで完全に訳出されていない。とは言え、本稿の意図は日本語による全文訳を初めて目論むという点にあるのではない。日本語を介して世界最古の文学の一端を紹介することは、日本語による文化の発信にとって無意味ではないにしても、各研究分野の専門家にとっては、世界的エジプト学者による既存の外国語訳がそれぞれの要求に応じてくれるであろう。あえて文字通りの拙訳を世に問う意義は薄い。むしろ本稿の主たる目的は、議論が再燃したエジプト語文法研究のために、その基礎資料を再検討しながら研究の現状を顧みることにある。当然、言語構造の解明に主たる関心がある筆者の甲羅以上のものは期待できない。そしてその過程において、所与の資料を統合的かつ総体的に把握し分析するために、本文のデジタル化と研究環境の情報化との可能性と限界とを探ることにこそ、筆者の目指すものがある。本稿のローマ字転写法の有益さが認められるならば、エジプト語学を含むエジプト学という、今なお視界を拡大し続ける広大な学問領域の、その一翼を担うPT研究の基礎資料として、翻字(transliteration文字対応方式)・転写(transcription単語対応方式)本文を、少なくとも検索し易い簡便な形で提供することは可能ではないかと思う[6]。

## 3 ピラミッド・テキストの内容

ブレストッド(J.H.Breasted)は、ピラミッド・テキストの内容を次のように要約している[7]。

- (1) 葬祭儀礼と墓前での供養物に関する祭儀
- (2) 呪文
- (3) 古祭式
- (4) 最古の宗教讃歌
- (5) 古神話の断片
- (6) 故王のための祈祷と誓願

本稿における筆者の上述した視点からPTの意義を整理し直すと、次のようになる。

- (1) 葬祭文書でもあり、祭儀執行の手引書[8]でもありうる、古代エジプト人の宗教、神話、哲学を含む精神生活を当事者の言葉で伝えた一次史料であること
- (2) 古王国時代の史料かつ言語資料即ち古代エジプト語の最も古い段階に属する古エジプト語で書かれた資料が後代に比し希薄な中で[9]、例外的に大部とも言える分量を残すため、言語構造の解明に欠かせない纏まった資料を提供すること(残念ながら、後述の文字体系の特性も一因となり、言語構造解明に十分な資料とは言い難い。アフロアジア言語学がその不足を補うことが期待される。)
- (3) 5人以上の王(ファラオ)や王妃がPTを残したため(後述)多数の異本が残され、時代の古さにも拘わらず本文校訂が可能なこと(古代エジプト語の資料は孤本が珍しくなく、そのため、孤立例とも言うべき例証形式が、偶然に記録される機会が少なかった一般的な語形にすぎないのか、例外形なのか、それとも誤記なのか、判断に迷う場合が少なくないことを思うと、幸運としか言えない。)
- (4) 石刻資料であるため、手書き筆写本と異なって後世の手による加筆訂正の可能性が極めて低いこと、即ち、誤記を例外として、少なくともPT成立当時またはそれ以前の言語状態の反映であることが保証された資料であること
- (5) 人類史の流れを劇的に変えた文字という伝達手段が、既に備忘のための視覚標識の域を脱したものの精神の繊細な記録媒体としては未成熟とも言える時代、その当時の壮大な実験を仔細かつ実証的に検証できること

#### 4 章節番号について

PTは、彼以前の研究を集大成したゼーテにより、内容に基づく並行本文一覧という観点から編纂し直された際、章(Spruch/chapitre/utterance,spell等)と節(Abschnitt,Paragraph/paragraphe/chapter,section等)に分けられ、節はさらに行(Stück/verset等)に分けられた[10]。その結果、章数にして714章、節数にして2217節に達した。これは壁面の縦書き刻文の行立てを反映しない。要するに全く無関係である。今日の研究者もこれに従い、章番号あるいは節番号と行記号(a,b,c...)とによって特定する。その際、例えばアレン(J.Allen)は、章番号をPT 714、節番号をPyr. 2217とすることによって両者の混乱を避けている。292aとあれば節番号(および行記号)である。これに、さらに54c W等のピラミッド略号(この場合はW)を加えて、異文を残すピラミッドを特定する[11]。ただし、本稿ではコンピュータ処理の出力結果をそのまま利用して、W0054cなどと表示することがある。

ゼーテはさらなるPTの発見は期待薄と考えていた[12]。ところがその後、ジェキエ(G.Jequier)によるNおよびその3人の王妃のPTの発見、再発掘によるT,P,Mからの新たな断片の発見が加わり、これらと第8王朝のイビ王(アバ王とも)のPT断片とを含めると、ゼーテの編集による章分けとその章番号および節番号の割り振りの見直しが必要となった。新資料を発掘して1928-36年に出版したジェキエはゼーテと異なる視点から番号を振った。困みに、古エジプト語文法を著したエーデル(E.Edel)もそれに従った。しかし、これはゼーテとの相互参照を難しくしたため、1950年になってアレン(T.G.Allen)がゼーテの章番号を基礎にして新たな割り振りを行った[13]。その後、1969年にフォークナー(R.O.Faulkner)が新たな章番号を追加した本文補遺を出版したが、自身の英訳との参照の便宜を優先して並行本文を考慮しないという方針をとったため、ゼーテの編纂意図に反する結果となった[14]。結局、ゼーテ以降に新たに発見されたPTをも統合する標準的方式は現在も定まっていない。筆者は、本稿において底本としたゼーテの章節番号を原則として尊重し、必要に応じて、新資料を増補改訂する体裁を取ったアレンの方式に従いたい。底本との相互参照の便宜を考慮しての判断である。

ところで、そもそも章立ては何を拠り所とするのか。章は一般にDd mdw「呪文(文字どおりには、言葉を使うこと)」という語句で始まり、神殿の文字で終わる[15]。そして章と節との区別は、必ずしも章が上位区分で節がその下位区分という訳ではない。例えば、第1節は最初の2章(第1,2章)を含み、第3章は第2節から第3節の一部に及び、第3節は第3章の終盤と続く2章(第4,5章)とを含む。このように、形式的には冒頭のDd mdwという語句の有無によって章が区分されることが多いとは言え、第6-8節に懸けての冒頭、第16章や第19章の冒頭のようにDd mdwが現れないこともある。ピラミッド毎に、その用法に何らかの偏りがあることは、明らかである[16]。しかし、16c,18d等に頻繁に現れるDd mdw zp 4「呪文を4回唱えること」は章立てに全く関与しない[17]。

#### 5 翻訳と注解

以下の注解において文法略号として:A=形容詞,N=名詞,V=動詞,p=前置詞を使用する。また頻繁に参照される文献についても、略号によって示す。末尾の文献略号一覧を参照。さらに、PTの用例および用例数は最初の500節に限定する。目下、それ以降の入力本文の校合が鋭意進行中のためである。

##### 第1章

(Pyr1)

a Dd\_mdw jn nw.t ;x.t wr.t  
z; pw smsw (ttj) wp X.t

恵み深く大いなるヌートによる呪文

テティ王こそは長子、[我が]胎を開いた者

b mrj.j pw Htp.n.j Hr.f

彼は私の愛する者、私は彼を喜ぶ

## 第2章

(Pyr1)

c Dd\_mdw jn gb  
 z; pw (ttj) | n X.t  
 /// /// /// /// ///  
 d /// /// /// /// ///

ゲブによる呪文  
 テティ王こそは、[我が]身の子  
 . . .  
 . . .

1a,cの冒頭はDd-mdw jn Nw.t/Gbという並行句により構成される。即ちヌートあるいはゲブという神格によって(jn)唱えられた呪文(Dd\_mdw)という定型句で始まり、その呪文の内容が続く。この定型句は最初の5節で計8回使用され(1a,c,2a,3b,d,4a,5a,8h;1cのゲブ以外は全てヌートが動作主)、その後は583a(jn Hrw「ホルスによる」)まで現れない。古代エジプトの神格全般については、シェーファー(Shafer)を参照[18]。不定詞とその目的語から構成される定型句のDd\_mdwについては、G306,1を参照。天空の女神ヌートが発した呪文は、1a後半からbに掛けて述べられる。上の訳は、wr.tを;x.tと等位にとり、女神に性・数を一致させた形容詞とするが、副詞の可能性もある。その場合は「大いに恵み深いヌート」となる。形容詞であることが明白な、5a,459cのnw.t wr.t「大いなるヌート」を参照。一方、ここと同様に形容詞とも副詞ともとれる4aのnw.t nxb.t wr.tがある(後述参照)。

続いて、王名であることを示す通称カルトゥーシュ(エジプト語ではSnw)で囲まれたテティ王(ttj)、その彼が(pw)長子たる男子(z; smsw)であり、ヌートの胎(X.t)を開いた者(wpの分詞)である、と同格で受けている。1bでは、彼が(pw)私(j)即ち女神の愛する者(mrj)であり、私(j)即ち女神が彼に喜びを感じると述べる。この「を気に入る、を喜ぶ」を意味するHtp Hrという動詞句は、3aのHtp jt Gb Hr.f「父ゲブは彼を喜ぶ」や258cのHtp Hrw Hr jt.f Htp jtm Hr rnp.wt.f「ホルスは彼の父を喜びアトムは彼の年[複数]を喜ぶ」にも見られる。

大地の神ゲブが発した呪文は、1c後半から始まるが、dに続いたと思われる本文は損傷して読めない。ここの構文には古代エジプト語独特の統辞法が現れている。即ちz; pw (ttj) | n(j) X.t(.j)は字義どおりには「男子-彼-テティ-の(=に属する)-[我が]身体」つまり「王は我が肉親」となる、N]述部 proN]繫辞 N]主語 関係A+Nまたはprep+N]修飾句 という構文である。1aのwp X.tと1cのnj X.tとの対応関係は7bMBのz; nw.t nj X.t.sと8fのz; nw.t wp X.t.sの間にも見られる。z; pw ... (ttj)|の後続語句としては、PTの最初の数章に偏在して、以下のような用例が現れている:

1a z; pw smsw (ttj) | wp X.t(.j) 「[我が]胎を開いた者」  
 1c z; pw (ttj) | nj X.t(.j) 「[我が]肉親」  
 2a z; pw (ttj) | mrj.j 「我が愛する者」  
 5a z; pw (ttj) | nj jb.j 「我が心に属する者」  
 4a mrj.j pw (ttj) | z;.j (2aと語句が逆転している)

## 第3章

(Pyr2)

a Dd\_mdw jn nw.t c;.t Hr.t\_jb Hw.t Xr.t  
 z; pw (ttj) | mrj.j

下宮の中央の偉大なるヌートによる呪文  
 テティこそは私の愛する子

b wtjw Hr nz.t gb Htp.n.f Hr.f	ゲブの[玉]座の上の長子 彼(ゲブ)は彼(テティ)を喜び
c Dj.n.f n.f wc.t.f m_b;H psD.t c;t (Pyr3)	大いなる九神[19]の前で彼に相続権を与えた
a nTr.w nb.w m Hccw.t Dd.sn nfr.wj (ttj)l Htp jt gb Hr.f	歓喜の中にある全ての神々は言う 素晴らしきかなテティ 父ゲブは彼を喜ぶ

2aでは女神スートの修飾句が「偉大なる」c;t、そして、下の宮Hw.t Xr.tの「中央に位置する」Hr.t\_jbへと変化している。Hr.t\_jbには名詞としての「中央の間」があるが、ここでは列柱を描く限定符がないため、形容句Hrj\_ibの女性形と見なした。呪文は、テティ王こそ(pw)私が愛する(mrj.j)子であると述べる。mrj.jは受身分詞に所有を示す人称接尾辞が付いた形式と思われるが、人称接尾辞を欠くmrjの異表記と見ることできる。G361参照。

2b冒頭の単語wtjwについては、FCD72, wtT 'beget', wttw 'begetter', wTtw 'offspring' および650b: Twt jt n Hrw, wtT sw m rn.k n wtT「汝はホルスの父、生む者という汝の名において彼を生んだ」を参照。2bでは、wtTではなくwtj[tj]w = wtjw と綴られていて音形上の問題があるものの、ひとまずFE 'first-born' に従い、中王国時代以降に一般化した wtT>wtt の音変化が既に現れているものとしておく。いずれにしろ冒頭の単語は、男子z;と同格であり、これに前置詞句Hr nz.t Gb「ゲブの玉座の上」が掛かる。これに続くHtp.n.fおよび2c冒頭のDj.n.fは、上の訳ではゲブを主語とする動詞文としたが、ゲブに掛かる形容詞節とも考えられる。

3aは、N+A]主部 p+N]述部からなる非動詞文(の副詞文)に動詞文Dd.snが続くとすれば、「全ての神々が歓喜の中にあり、彼らは言う」となるが、N+A]主部 p+N]修飾句として、上のように訳せる(4c,5c参照)。その語った内容は、第2節目後半がテティの形容詞節から成る1文とも解釈できる。その場合は「父ゲブが(テティを)喜ぶ(その)テティは何と素晴らしいこと」と訳せよう。jt「父」をjt i09と転写し、jt.fとしないのは、5dのjt i09.T = jt.T「汝の父」に拠る(jt.f.Tでは意味をなさない)。

#### 第4章

(Pyr3)

b Dd_mdw jn nw.t (ttj)l rDj.n.j n.k sn.t.k ;s;t	スートによる呪文 テティよ私は汝に汝の妹イシスを与えた
c nDr.w.s jm.k Dj.s n.k jb.k n D.t.k	彼女が汝を抱え 彼女が汝自身の心臓を汝に与える[ように]

#### 第5章

(Pyr3)

d Dd_mdw jn nw.t (ttj)l rDj.n.j n.k sn.t.k nb.t_Hw.t	スートによる呪文 テティよ私は汝に汝の妹ネフチウスを与えた
e nDr.w.s jm.k Dj.s n.k jb.k n D.t.k	彼女が汝を抱え 彼女が汝自身の心臓を汝に与える[ように]

章を跨いで3bからeに掛けての対句構成は明白である。bとdではイシスとネフテュスという二人の女神が交替するのみ、cとeでは同じ語句を反覆する。cおよびeの後半は、逐語的には「彼女が汝のために汝の心臓を(他の肉体ではなく他ならぬ)汝自身に与える(ように)」となる。ここは、ミイラ化による肉体保存、肝臓・心臓・肺臓・腸の保存に関連する一節であろう。

## 第6章

(Pyr4)

a Dd_mdw jn nw.t nxb.t wr.t mrj.j pw (ttj)   z; j	多産にして大いなるヌートによる呪文 テティは我が愛する者、我が子
b rDj.n.j n.f ;x.tj sxm.f jm.sn Hrw ;x.tj js	私は彼に彼が(そこで)支配する地平を与えた 地平のホルスのように
c nTr.w nb.w Dd.sn bw m;c pw mrj.T pw (ttj)   m_m ms.w.T	全ての神々は言う これは真実である テティこそは汝の子らの中で汝の[最]愛の者
d stp_z; Hr.f D.t	永久に彼を守れ

4aでヌートの修飾句がさらに入れ替わる。上述(1a)のとおり、wr.tは副詞の可能性もあり、その場合は「大いに多産なる」と訳せる。

4a,cはそれぞれ前半部と後半部とが対をなし、前半部で言葉を発する主体が示され、後半部でpwを用いた名詞文が発話される。stp\_z;は複合動詞で前置詞Hrを従える。第6章は、次の第7章と構成において並行的である。したがって、4dは補足的語句とすべきであろう。

## 第7章

(Pyr5)

a Dd_mdw jn nw.t wr.t Hrt_jb Hw.t Snj.t z; pw (ttj)   n jb.j	シェニト宮中央の偉大なるヌートによる呪文 テティは我が心の子
b rDj.n.j n.f dw; t xnt.f jm.s Hrw js xntj dw; t	私は彼に彼が(そこを)司るべき冥界を与えた 冥界を司るホルスのように
c nTr.w nb.w Dd.sn	全ての神々が言う
d jw jt.T Sw rx mrr.T (ttj)   r mw.t.T tfnt	汝の父シューは知る 汝がテティを汝の母テフヌトよりも愛することを

5aは第3章2aのDd\_mdw jn nw.t c; t Hrt\_jb Hw.t Xr.t z; pw (ttj) | mrj.jと僅かに異なるに過ぎない。即ちwr.t「大いなる」がc; t「偉大なる」、「下の宮」が「シェニト宮(詳細は不明)」、「我が愛する(mrj.j)我が子」が「我が心(jb.j)の子」となる点である。このような並行関係が語義の解明に役立つ。上の訳は、さらに第6章4b-cと第7章5b-dとの構文の並行性にも注目した訳である。即ち、4cのmrj.T以下はbwを受ける従属節、5dのmrr.T以下はrxの目的語の従属節である。

シューは大気の神であり、テフヌトは湿気の神である[20]。5bの後半部が名詞dw; t冥界を修飾する関係節形であることは、jm.sの接尾辞s(s3f)がdw; t(f)以外を指し得ないことから明らかである。これと対をなすdの後半部は、文法上は動詞rxの目的語となる従属節である。

5b後半のHrw js xntj dw;tの構文は、4b後半のHrw\_;H.tj js「二つの地平(;H.tjは双数)のホルスのように」と並行であり、57dにもほぼ同義のjnpw js xntj jmntjw「西方者達(即ち死者達)を司る(或いはその第一人者たる)アヌビスのように」がある。PT中のjsには、ここの(1)「～、のように」を意味する用法(18例)の他に、(2)接続詞n/n\_nttに続き原因・理由を表す従属節(6例)、(3)否定詞節(4例)、(4)疑問詞節(1例)、(5)強意(1例)の用法がある[21]。いずれの例証箇所も、jsは(接続詞、否定詞、疑問詞を除く)節頭から2番目の位置を占める。また、N+AやN+Nの属格構成は、時に1語(4b:Hrw\_;x.tj js「二つの地平のホルス」等)、時に2語(Xrj js dp「ナイフを冠する者」)として扱われる。E828参照。E828によると(1)の用法は古エジプト語ではPTだけに現れ、中エジプト語の稀な用例を引用するG247の説では(5)が基本となって他の用法を派生した。

## 第8章

(Pyr6)

PA cnx n sw.t bj.t (mrj rc)| cnx Dt

PB /// mrj n sw.t bj.t (ppj)| Dj cnx Dt

MA cnx n sw.t bj.t nb.tj cnx xc.w Hrw.wj nbw (mr n rc)| cnx mj rc

MB cnx n sw.t bj.t nb.tj cnx xc.w Hrw.wj nbw (mr n rc)| cnx Dt

N cnx n sw.t bj.t (nfr k; rc)| nb.tj nTr xc.w (ppj)| cnx Dt

PA 生きよメリラア王永久に生きよ

PB ・ ・ ・ 愛しき方上下エジプト王ペピ王永久の命が与えられよ

MA 生きよ上下エジプト王二柱の神輝ける命黄金の二羽のホルス・メルエンラア王ラアの如く生きよ

MB 生きよ上下エジプト王二柱の神輝ける命黄金の二羽のホルス・メルエンラア王永久に生きよ

N 生きよ上下エジプト王ネフェルカーラア王二柱の神輝ける神・ペピ王永久に生きよ

ペピー一世つまりメリラア王に2種、メルエンラア王に2種、ペピ二世つまりネフェルカーラア王に1種、計5種の版があり、ご覧のとおり互いに微妙な異同がある。nb.tj二柱の神とxc.w輝けるとの2語が共通する点に、MとNとの本文の親近性が伺える。

## 第9章

(Pyr7)

a

P Hrw mrj (ppj)| n sw.t bj.t (ppj)| nb.tj mrj X.t (ppj)| Hrw.w nbw (ppj)|

MA cnx Hrw cnx xc.w n sw.t bj.t nb.tj cnx xc.w (mr n rc)| Hrw.wj nbw (mr n rc)|

MB cnx Hrw cnx xc.w n sw.t bj.t nb.tj cnx xc.w (mr n rc)| Hrw.wj nbw (mr n rc)|

MC cnx Hrw cnx xc.w n sw.t bj.t nb.tj cnx xc.w (mr n rc)| Hrw.wj nbw (mr n rc)|

NA cnx Hrw nTr xc.w n sw.t bj.t //////////////// nb.tj nTr xc.w (ppj)|

NB cnx Hrw nTr xc.w n sw.t bj.t (nfr k; rc)| nb.tj nTr xc.w (nfr k; rc)| sxm Hrw (ppj)|

NC cnx Hrw nTr xc.w n sw.t bj.t (ppj)| (nfr k; rc)| sxm Hrw (ppj)| (nfr k; rc)|

ND /// /// /// //// n sw.t bj.t nb.tj nTr xc.w sxm Hrw (ppj)| (nfr k; rc)|

P 愛すべきホルスたるペピ王上下エジプト王ペピ王二柱の女神胎の愛すべき者ペピ王黄金のホルス達ペピ王  
 MA 生きよホルス輝ける命上下エジプト王二柱の女神輝ける命メルエンラア王二羽の黄金のホルス、メルエンラア王  
 MB 生きよホルス輝ける命上下エジプト王二柱の女神輝ける命メルエンラア王二羽の黄金のホルス、メルエンラア王  
 MC 生きよホルス輝ける命上下エジプト王二柱の女神輝ける命メルエンラア王二羽の黄金のホルス、メルエンラア王  
 NA 生きよホルス輝ける神上下エジプト王・・・・・二柱の女神輝ける神ペピ王  
 NB 生きよホルス輝ける神上下エジプト王ネフェルカーラア王二柱の女神輝ける神ネフェルカーラア王ホルスの王杖ペピ王  
 NC 生きよホルス輝ける神上下エジプト王ペピ王ネフェルカーラア王                   ホルスの王杖ペピ王ネフェルカーラア王  
 ND ・・・・・上下エジプト王                   二柱の女神輝ける神ホルスの王杖ペピ王ネフェルカーラア王

b

P           jwcw gb mr.f (ppj)| nTr.w nb.w mrj (ppj)| Dj cnx Dd w;s snb ;w.t\_jb nb mj rc  
 NC z; rc jwcw /////////////// (ppj)| (nfr k; rc)| Dj cnx Dd w;s           ;w.t\_jb nb Dt  
 MA        jwcw gb (mr n rc)| nTr c; nb p.t (mr n rc)| cnx Dt  
 MC        jwcw gb (mr n rc)| nTr c; nb ;x.t (mr n rc)| cnx mj rc  
 NA z; rc j... gb (nfr k; rc)| Dj cnx mj rc Dt  
 NB z; rc jwcw gb ms nw.t           cnx           Dt  
 ND        jwcw gb                   cnx mj rc Dt  
 MB z; nw.t nj X.t.s (mr n rc)| Hrw ;x.tj nb p.t (mr n rc)| cnx mj rc

P           ゲブの子孫彼の愛するペピ王全ての神々が愛するペピ王ラアの如く生命不滅支配健康喜び全て  
 を与えられた方  
 NC ラアの子・の子孫//////////ペピ王ネフェルカーラア王生命不滅支配喜び全てを永久に与えられた方  
 MA        ゲブの子孫メルエンラア王偉大なる神天空の主メルエンラア王永久に生きよ  
 MC        ゲブの子孫メルエンラア王偉大なる神地平の主メルエンラア王ラアの如く生きよ  
 NA ラアの子ゲブ・・・・ネフェルカーラア王ラアの如く永久に命を与えられた方  
 NB ラアの子ゲブの子孫ヌートの息子           永遠に生きよ  
 ND        ゲブの子孫           ラアの如く永遠に生きよ  
 MB 女神ヌートの子彼女の胎の者メルエンラア王地平のホルス天空の主メルエンラア王ラアの如く生きよ

7bNBにはz; rc, jwcw gb, ms nw.t「ラアの子、ゲブの子孫、ヌートの息子」とあり、使い分けられているかの印象を与えるが、次の8eにz; gb、8fにz; nw.tがあり、むしろ類義語の列記による文体上の技巧であることがわかる。このような並行例もまた語義を知るのに役立つが、細部にわたる解明は困難なことが多い。因みに、「子供・息子・娘」を意味する単語はエジプト語に十指以上ある(Hrd, ms, mswtt, xnw, x, nxnw, sDtj, Hwn;Xrdt, xprj, Hc;w, mswt;z;, z;t, Srj, Srtj;jnpw「王子・王女」)[22]。PTでは、z;は多数例証され、その女性形z;t「娘」は386a,468aなどに11例ほど例証される。jwcwはここ以外には292c,475a,483cに例証されるのに対し、その女性形jwc.tは例証されない。msはmsj「産む」からの派生語であって(131e,262bに動詞の用例がある)、語源的には「産す子>息子」を彷彿させる。その女性形ms(w).t(t)は例証無し。

7bNBで、エジプト語では付加句のcnx Dtをnw.t「女神ヌート」のみに掛け、挿入句として「ヌート(永久に生きよ)の息子」と訳す可能性は一応排除して良い。なぜなら、女王や王女に関して用いられる場合



はcnx.tjが予想されるので(G313、古完了形)、ここはまずms nw.tまたはjwcv gbという結合全体に掛かるとすべきである。

7bP,NCの;w.t\_jb nb「喜びと全て」を;w.t\_jb nb.(t)「あらゆる喜び」と訳すことは可能である。なぜなら、女性語尾tの省略は珍しくないからである。W33a: jr.tj Hrw km.t HD.(t)「黒と白とのホルスの両眼」で女性形のjr.t「眼」の双数に掛かる形容詞は、文法的にはkm.t「黒い」とHD.t「白い」の筈である。309aT: nb.(t) P = 309aW: nb.t P「ベ(地名)の女主人」を参照。

後代カルトウーシュに付き物の定型語句であるn\_sw.t\_bj.t「上下エジプト王」、Hrw\_nbw「黄金のホルス」、cnx mj rc「ラアの如く生きよ」、cnx Dt「永久に生きよ」等は、第6-8節にしか現れない。

## 第10章

(Pyr8)

a cnx Hrw cnx xc.w n sw.t bj.t (Hrw m Hm.f)| (mr n rc)|

b nb.tj cnx xc.w (Hrw m Hm.f)| (mr n rc)|

c Hrw.wj nbw (Hrw m Hm.f)| (mr n rc)|

d wsjr nb dw;.t (Hrw m Hm.f)| (mr n rc)|

e z; gb mrj.f (Hrw m Hm.f)| (mr n rc)|

f z; nw.t wp X.t.s (Hrw m Hm.f)| (mr n rc)|

g Dj cnx Dd w;s snb mj rc Dt

a ホルスよ生きよ輝ける者よ生きよ上下エジプト王ホルエムヘムフ・メルエンラア

b 二柱の女神輝ける命ホルエムヘムフ・メルエンラア

c 二柱の黄金のホルス神ホルエムヘムフ・メルエンラア

d 礼拝の主オシリス神ホルエムヘムフ・メルエンラア

e ゲブの子彼の愛する者ホルエムヘムフ・メルエンラア

f ヌートの子彼女の胎を開きし者ホルエムヘムフ・メルエンラア

g ラアの如く永遠に生命不変支配健康が与えられよ

## 第11章

(Pyr8)

h Dd\_mdw jn nw.t Xnm.j nfr.k m X.t b; pn n cnx Dd w;s snb nb

i nj Hrw nTr xc.w n sw.t bj.t (ppj)| (nfr k; rc)| nb.tj nTr xc.w (nfr k; rc)|

k sxm Hrw nbw (ppj)| (nfr k; rc)| cnx Dt

h ヌートによる呪文我汝の美をこの霊の胎内に抱く、生命不変支配健康全てのために

i ホルスに属する者輝ける神上下エジプト王ペピ・ネフェルカーラア二柱の女神輝ける神ネフェルカーラア

k 黄金のホルスは光り輝くペピ・ネフェルカーラア永久に生きよ

第10章の8a-fにかけては各行末がカルトウーシュに囲まれた王名で終わり、6連の並行的構成となっている。そこから推測すると、第11章の8iを2連に分けて計3回の(nfr k; rc)|の反復よりなる並行構成が考えられなくはない。もっともk行末にcnx Dtが続くことは説得力を欠く。そのことが、ゼーテが2連構成とし

て編集した理由かもしれない(行記号のjは元々ない)。

8h末のsnb[nb]という表記は、1語(snb)ではなく2語(snb nb)を表すものである。snb「健康」が2連音文字[nb]を伴う例はFCD231,L61,M508,WB158fの何れにも見当たらない。しかしsnb nb「あらゆる健康」では意味が通りにくい上に、PTではここ以外にこのような連語が見当たらないので、7bと同様にnb「全てのもの」と訳した。

## 第12章

(Pyr9)

a //////////////////////////////////////

.....

## 第13章

(Pyr9)

b Dd\_mdw

呪文

d.j n.k tp.k

私は君のために君の頭を置く

smn.j n.k tp.k jr qs.w

私は君のために君の頭を骨の上に据える

## 第14章

(Pyr9)

c Dd\_mdw Dj.j n.f jr.tj.f Htp.f | Htp |

呪文 私は彼が安らぐよう彼の両眼を彼に与える | Htpの供物

## 第15章

(Pyr9)

d Dd\_mdw Dj.n n.k gb jr.tj.k Htp.k //

呪文 ゲブは君が安らぐよう君の両眼を君に与えた・・・

9c,dに各1回現れる動詞Htpの語幹は、見かけ上の綴りの違いから、cはsDm.t.f形、dはsDm.f形に見える。ところが、次のN102aの例を参照。

(翻字) D[mdw] {Dj}n nk {gb}b {jrt}{jrt01}:k [Htp]tk | [Htp]`r031 | 1

(転写) Dd\_mdw Dj.n n.k gb jr.tj.k Htp.k | Htp | 1

「呪文 与エタ 汝ニ ゲブハ 汝ノ両眼ヲ 汝ガ安ラグヨウ | 供物 | 1 品

即ち、同じNに所属するほぼ同一の並行本文でありながら、9dでは[Htp]k、102aでは[Htp]tkと表記される。この異表記が同一語形を意図したものとすると、Htp.t.kつまりsDm.t.f形なのか、Htp.kつまりsDm.f形なのか問題となる。

A. まず文法面から考察する。

9c,102aの語幹が<sup>3</sup>Htp.tの場合、先行詞jr.tj.f「彼の両目」に文法上の性・数を一致させた関係節形か、またはsDm.t.f形ということになるが、後者は用法が極めて限定されていて、ここでの使用は不適切であることから、必然的に関係節形となる。従属節にはふつう先行詞に遡及する代名詞(resumptive pronoun)が必要であるが、先行詞が従属節の主語となる場合には不要である。他動詞としてのHtpの用例は388bに例証される。

WPN388b (.)| pw Htp t;wj (W)| pw zm;j j t;wj

コノ 我ハ 満足サセタ 両国ヲ コノ 我ハ 統一シタ 両国ヲ

9d,102aが何れもHtp.t.kであれば9cのHtp.t.fと文法上同形となり均衡がとれるものの、9dでtを略記した綴り[Htp]をHtp.tと読まなければならないことが難点である。これとは逆に、9cの[Htp]tf,102aの[Htp]tkの何れもHtpつまりsDm.f形とする方は、用例豊富な表記慣用から説明し易い。

B.次に表記面から考察する。

例えば、(1)慣用句Htp Dj n sw.t/Gb「王またはゲブ神の供物」中のHtpは、[Htp]の綴りが10例あるのに対し、[Htp]tと綴られるのはT101bの2例だけである。また(2)慣用句Htp\_nTr「神の供物」中のHtpの表記は、用例数は少ないものの、

M115c:[Htp]`x02`w22`x061`q051

W215a:[Htp]`r031`x03`w22`x06,

N215a:[Htp]t`x01`w231[.....]`h01

となっている。そして標準的辞書は何れもHtp.t\_nTrを採用していない。さらに、(3)定型句sx.t Htp「供物の畑」に現れる綴り[Htp]tの語形がHtp.tでなくHtpであることは、その並行本文の一つに現れる[Htp]tp+限定符という表記から明らかであろう。

T0284b [Htp]t`x02`w22`x06 (単数)

W0284b [Htp]t`x02`w22`x06

W0289b [Htp]t`x02`w22`x061 (双数)

T0289b [Htp]tp`x02`w22`x061

これに次の用例を加えることができる(限定符は略す):

WTMN130b [Htp]tp(3例),[Htp]t(1例)

WTMN471b [Htp]tpj(1例),[Htp]tp(1例)

ただし、並行本文であれば一語一句に至るまで常に同一形式であると断定することは早計である。次の例を参照。

W0133d [cnx]tf jm [cnx] (W)| jm

T0133d [cnx]nxtf jm [cnx]nx (T)| jm

M0133d [cnx]nxf jm [cnx] (M)| [.....]

N0133d [cnx]nxf jm [cnx]nx (N)| jm

彼ガ糧トスルーソレヤー糧ニスルー私ハーソレヤ「彼が糧とする物を私は糧にする」

即ち、WTの本文ではcnx.t.fであるのに対し、MNの本文ではcnx.fであって、共に目的語として機能する分詞派生の実詞に違いはないものの、文法上の性が異なっている。これに対し、語形がHtp.tであれば、表音補助文字(phonetic complement送り仮名)は次の例のようにptであったと思われる。

W0059a [Htp]ptnf = Htp.t.n.f

W0059c [Htp]pt = Htp.t

その他の例証箇所も含めたjr.t (Hrw) Htp.(f)「(彼が)満足した(ホルスの)眼」という語句の表記は以下のとおりである:

N009c Dj.j n.f jr.tj.f Htp.f :[Htp]tf

N009d Dj.n n.k gb jr.tj.k Htp.k :[Htp]k

N102a Dj.n n.k gb jr.tj.k Htp.t.k :[Htp]tk

W058c Dj n.f jr.t Hrw Htp.t.f Hr.s :[Htp]tf

N058c	Dj	n.f	jr.t	Hrw	Htp.t.f	Hr.s	:[Htp]tf
W059a	m	n.k	jr.t	Hrw	Htp.t.n.f	Hr.s	:[Htp]ptnf
N059a	m	n.k	jr.t	Hrw	Htp.t.n.f	Hr.s	:[Htp]tnf
W059c	m	n.k	jr.t	Hrw	Htp.t	Hr.s	:[Htp]pt
N059c	m	n.k	jr.t	Hrw	Htp	Hr.s	:[Htp]

59aのHtp.tは先行詞女性単数形jr.t Hrw「ホルスの眼」に性・数が一致した関係節形sDm.t.n.fである。そのことは、女性単数語尾tの他に、前置詞が女性単数の遡及代名詞(resumptive pronoun, G146)のsを従えることから明らかである。これに対し、59cの形式はsDm.t.f形の命令形と考えられる。上の一覧に明らかのように、同じ本文に対してWとNで表記が異なっている。

59aについては、W56a,bの一貫した[Htp]の表記(5例)に対するN56a,bの並行本文における一貫した[Htp]tの表記(5例)を参照。

W0056a	----	m	[Htp]	--	-----	m	[Htp]	--	-----	m	[Htp]				
N0056a	----	m	[Htp]t	--	-----	m	[Htp]t	--	-----	m	[Htp]t				
		rs.T	m	Htp	rs	t;j.t	m	Htp	rs	t;j.tt	m	Htp			
		「汝安ラカニ目覚メヨ女神タイトヨ安ラカニ目覚メヨ女神タイトヨ安ラカニ目覚メヨ」													
W0056b	----	---	-----	--	m	[Htp]	----	---	-----	----	--	m	[Htp]		
N0056b	----	---	-----	--	m	[Htp]t	--	-----	----	---	-----	----	--	m	[Htp]t
		jr.t	Hrw	jmj.t	dp	m	Htp	rs	jr.t	Hrw	jmj.t	Hw.wt	nt	m	Htp
		「デブ中ノホルスノ目ヨ安ラカニ目覚メヨ、ネト冠中ノホルスノ目ヨ安ラカニ目覚メヨ」													

つまり、[Htp]tはHtpの異表記の一つとして確立していたと思われる。この[Htp]tという異表記自体はWTNの何れの本文にも見られるので、特定の時代や王に限られた綴り癖とは言えないようである。

表記 用例数 例証箇所

[Htp]	4例	W56a,b,N101b,W215a
[Htp]t	12例	N9c;N56a(3例),N56b(2例),T101b(2例),N215a,T284b,W284b,W289b
[Htp]tp	1例	T289b

因みに、[Htp]tの多く(8例)は節末にある:N56a(3例),N56b(2例),T284b,W284b,W289b。しかし節中にも[Htp]tの表記がある以上(N9c,T101b,N215a)、[Htp]tが直ちに語末音pの脱落を反映した表記の証拠とは言えない。T101b(2例)が別の観点からしても例外的であることは(1)で言及した。(4)上の56a,bで見た定型句のm Htp「安らかに」の表記については、この他にも、本文に長短があつたり、tとpとの位置関係が垂直方向か水平方向かと言った違いはあるものの、383a-cでは例証される全て(17例)が[Htp]tpと綴られる。その他、Htpを表記した[Htp]tpの綴りは62例に上る(4例のsHtp表記を含む)。しかし59cにおける綴りの違いは、現段階では説明がつかない。W34c,dには「恵み深さ」の意のHtp.tが計6回現れる:[Htp]tpt`y02(4例),復元形[Htp]tp<t>`y02(1例),[Htp]t`y02(1例)。最後の例は、行末で限られた空間に文字を詰込んだための略記と思われる。399cにも2例の[Htp]tpt`y02がある。

以上の慣用句・定型句を主とする多数の用例から推論すると、綴りが[Htp]tpなら語形はHtp、[Htp]ptならHtp.tと一義的に特定できるのに対し、[Htp]tは、何れにも解釈できる曖昧な表記ということになり、議論は再度振り出しに戻る。

9c行末のHtpに関し、FPTは9cではa htp-offering,102aではa table of offeringsと訳す。象形文字でテーブルの形が異なることと数詞の明示とを考慮して訳し分けたのであろうか。

## 第16章

(Pyr10)

a //////////////// jr.t Hrw | mw nmst

・・・・・・・・・・ホルスの目 | 水、ネムセト壺

10aの文字T341(T34の異体字、以下同様) の読みについては、G,p.515:[nm]、FEの” nmst-jar” を参照。

## 第17章

(Pyr10)

b Dd\_mdw DHwtj d n.f tp.f jr.f | mw ds

呪文トト[24]よ彼のために彼に向かって彼の頭を置け | 水、デス壺

## 第18章

(Pyr10)

c Dd\_mdw smz.n.f sw r.f | mw zwr 1

呪文彼は彼の許にそれを運ばせた | 水、コップ1個

10cはsmz n.f sw r.fつまり「彼のために彼の許にそれを運ばせよ」とも読める。

## 第19章

(Pyr10)

d //////////////////////////////////////

・・・・・・・・・・・・・・・・

## 第20章

(Pyr11)

a[Dd\_mdw h;] (N)|

jw.n.j m zxn.k

jnk Hr

b mDd.n.j n.k r;.k

jnk z;.k mrj.k

wp.n.j n.k r;.k

(Pyr12)

a[Hw.j sw n mwt.f

rmj.s sw

Hw.j sw n zm;.t r.f

b Hngw r;.k

mx;t.n.j n.k r;.k] jr qs.w.k

c Dd mdw zp 4

wsjr (N)|

wp.n.j n.k r;.k m xpx jr.t Hrw

呪文おお王よ

私は汝を求めて来た

私はホルス

私は汝のために汝の口を打った

私は汝の愛息子

私は汝のために汝の口を開けた

私は彼の母に彼のことを告げよう

彼女が落涙する[時]

私は彼に縛られた者に彼のことを告げよう

汝の口はHngw(語義不明)

私は汝のために汝の口を汝の骨共に対し整えた

呪文4回

オシリスたる王よ

私は汝のため汝の口をホルスの目のxpxで開けた

| xpS 1

| 前足 1 本

12aの動詞文でsw「彼を」が3回、bからcに懸けてr;「口」が3回反復されるなど、並行語法(parallelism)を思わせる要素がある。

## 第21章

(Pyr13)

a[Dd\_mdw

Hngw r;:k

U38.n.j n.k r;:k jr qs.w.k

b wp.j n.k r;:k

wp.j n.k jr.tj.k h; (N)|

c wp.j n.k r;:k]

m nw; wp w;:wt

msxtjw bj; wp r; n nTr.w

d Hrw jwn r; n (N)| pn

[Hrw wp r; n (N)| pn

e wn.n Hrw r; n (N)| pn

wp.n Hrw r; n (N)| pn]

f m wp.t.n.f r; n jt jm

m wp.t.n.f r; n wsjr jm

(Pyr14)

a m bj; pr m stS

msxtjw [bj; wp r; n nTr.w

b wp r; (N)| jm.f

Sm.f

c mdw.f Dt.f

xr psD.t c;:t m sr Hw.t jwn.t] jwnw

d jTj.f wrtt

xr Hrw nb pct

呪文

汝の口はHngw(語義不明)

私は汝のために汝の口を汝の骨共に整えた

私は汝のために汝の口を開けよう

私は汝のために汝の両眼を開けようおお王よ

私は汝のために汝の口を開けよう

ウェブワウエトの匏で

神々の口を開けた鉄の匏で

ホルスよこの王の口を開(ヒ)け

ホルスよこの王の口を開(ア)けよ

ホルスはこの王の口を開いた

ホルスはこの王の口を開けた

彼が(それで)彼の父の口を開けた物で

彼が(それで)オシリスの口を開けた物で

セトから出た鉄で

神々の口を開けた鉄の匏[で]

王の口がそれで開く[と]

彼は発ち

彼自ら語る

オンにある東宮の偉大なる九神の前で

彼はウェレト冠を頂く

pct宮の主であるホルスの前で

並行構文は明瞭である。13aの欠損箇所にはSPTが12bの並行本文から補った文字U38は、G,p.521にはmx;t「天秤」しかなく、FEは訳出していない。FCD115,mx;には自動詞として‘be like’を、他動詞として‘match,equal;adjust,counterpoise;make level’を掲載するのみである。

## 第22章

(Pyr15)

a Dd\_mdw wsjr (N)|

jnj.n.j n.k z;:k mrrw.k

wp r;:k

呪文オシリスたる王よ

汝の愛息子を汝の許に連れて来た

汝の口を開ける[筈の]

第23章

(Pyr16)

a wsjr	オシリスよ
jTj n.k msDD.w (W)  nb.w	全てのWの憎悪者共と
mdw m rn.f Dw	彼の名を悪し様に語る者共とを汝の許に攫え
b DHwtj	トトよ
jz jTj sw n wsjr	さあオシリスに害なす者を攫え
jnj.n mdw m rn n (W)  Dw	王の名を悪し様に語る者共を連れ去れ
c dj.n.k sw m Drt.k Dd mdw zp 4	汝は彼を汝の手に置け、呪文4回
jmj sfxx.k jm.f	彼を逃がすな
d z; jmj.k sfxx.w jm.f   z;T	汝彼を逃がぬよう気をつけよ   注げ

16aは、第6-8節以外で章冒頭にDd\_mdwが現れない最初の例である。

16bのjzはzj「行く」の命令形で「行け」。運動動詞を「さあ」の意味で使用する例はセム語にも見られる。ヨナ書1,7のlaku: wənappi:la:「さあ、くじを引いて」を参照[25]。16cのFEの注にsw, 'be harmful,dangerous', ...,jrt Hr swjt, 'the endangered Eye of Horus' ...; 'bad' of smellとある。dj.n.kはd(w) "give,place,out" (FCD308)のsDm.n.f形であるが、文脈に合わせて命令文に訳すべきである。16dのz;は動詞z;w "guard" (FCD208)である。G184.303.313.338,3: "beware lest" を参照。動詞sfxxの語尾がcとdとで異なるのは、文中の統語的機能の違いに因る。即ちcではjmj[命令形]+sfxx.k[定動詞sDm.f]であるのに対し、dではz;[命令形]+jmj.k[定動詞sDm.f]+sfxx.w[補語]だからである。

第24章

(Pyr16)

e[Dd_mdw]//////////	呪文・・・・・・・・
f//////////N  n wsjr	・・・・王オシリスに

16fについて、FEはNt68: DHwtj jz jT xft(y) n Nt...に従い、“O Thoth, hasten, take the King ‘s foe to Osiris” と訳す。

第25章

(Pyr17)

a Dd_mdw	呪文
zj zj Hnc k;.f	去る者は去った彼のカーと共に
zj Hrw Hnc k;.f	ホルスは去った彼のカーと共に
zj stX Hnc k;.f	セトは去った彼のカーと共に
b zj DHwtj Hnc k;.f	トトは去った彼のカーと共に
zj dwn cnwj Hnc k;.f	Dwn_cnwj神は去った彼のカーと共に
zj wsjr Hnc k;.f	オシリスは去った彼のカーと共に
c zj xnt jr.tj Hnc k;.f	xnt_jr.ty(両目の出た)神は去った彼のカーと共に
zj.tj Ddk Hnc k;.k	汝自身は去った汝のカーと共に

(Pyr18)

a h; (.)  c k; k m b; H.k	おお王よ汝のカーの腕は汝の前に
h; (.)  c k; k m xt.k	おお王よ汝のカーの腕は汝の後に
b h; (.)  rd k; k m b; H.k	おお王よ汝のカーの脚は汝の前に
h; (.)  rd k; k m xt.k	おお王よ汝のカーの脚は汝の後に
c wsjr (.)  rDj.n.j n.k jr.t Hrw	オシリスよ王よ我は汝にホルスの目を与えた
Htm.t Hr.k jm.s	汝の顔をそれで備えるよう
d pDpD snTr jr.t Hrw r.k	ホルスの目の香りは汝に注がれる
Dd mdw zp 4 snTr xt	呪文4回、香と火

17a-cに掛けての各行行頭のzjはsDm.f定動詞形である。A762,Aを参照。

snTr「香」の表記法は、以下のとおり多様である。表語文字コードはGに拠る。

	例証箇所(ピラミッド記号に注目)
表語文字 R9	N:23b,25a,26a,b,c,d,e,f,27a,a,b,b,c,e,28b
R91	W:23b,26f,27a(4例),b(4例),c,e,28a(6例),b(7例),c,29a
V33	WA18d,N19b,N20b,c
V331	WB18d
表音文字 sT	WC/NAB18d,NAB19a
[nTr]s	NB18d
[nTr]sT	WB18d
[nTr]sTr	T127a
[nTr]sT`n33	N29c,W/P376b,b,c,c
[nTr]sT`n333	W116a,d,
s[nTr]	WA18d
s[nTr]Tr	W29c
s[nTr]Tr`n33	W/M/N127a

R9とR91、V33とV331は僅かな変異形に過ぎないが、特にR9はNにのみ現れR91はWにのみ現れる等、まるで表記の違いが個体識別の一手段であるかのように、ピラミッド毎に同一表記を避ける意志が読みとられる。この種の差異化は、これまで検討してきたように、PTの随所に観察できる。特に、同じ本文の異本の関係にある場合に顕著である。葬祭碑文、奉納碑文における人名の明記もこのことと関連が無い訳ではない。それはまた、第4,5,13-15の各章に現れた思想とも無関係ではなからう。ここには、自己への拘りが貫いている。死して自我から解放され自由になるという思想とは無縁な思想である。もともと、上の表音表記の例に明らかのように、常時異表記に拘るというものではない。さらに、上表の18dに顕著に見られるが、まるでそれが有能な書記の証であるかのように、同一異本内でも表記が様々である。異本を含めると8箇所の例証箇所ですべて同一表記はWC,NA,NBの3箇所だけ、しかもNAは直後が欠損しているため断定はできない。snTrに関してはまた、概して表語文字による表記がPTの早い段階で現れ、表音表記は、18d,29cを例外として遅く現れると言えよう。もともと、石棺から始まって内壁の刻文に移り、次第に外部へと向かう現在の本文配列は編集段階で順序が逆転した、つまり本来は、入り口から羨道を通り前室か



ら玄室へ、最後に王が安置される石棺に至るといふ風に、葬列の進行に合わせて編集し直すべきだとするシュピーゲル(J.Spiegel)説があり、ピアンコフ(A.Piankoff)もそれに従った新たな訳を出版した[26]。

## 第26章

(Pyr19)

a Hrw jm wsjr (N)	オシリスたる王としてのホルスよ
m n.k jr.t Hrw xr.k	汝のために汝の許にホルスの目を取れ
m jr.t Hrw pDt.n.f m snTr.s	その香りを彼が発散させたホルスの目を取れ

## 第27章

(Pyr19)

b Dd_mdw wsjr (N)	呪文オシリスたる王よ
m jr.t Hrw	ホルスの目を取れ
Htm kw m snTr.s	その(眼の)香りで汝を飾れ

## 第28章

(Pyr19)

c Dd_mdw wsjr (N)	呪文オシリスたる王よ
Dj.n n.k Hrw jr.t.f	ホルスは汝に彼の目を与えた
Htm n.k Hr.k jm.s	それにて汝の顔を飾れ

## 第29章

(Pyr20)

a Dd_mdw h; (.)  pw	呪文おおこの王よ
jw.n.j jn.j n.k jr.t Hrw	私は来た、私は汝の許にホルスの目を運んだ
b Htm.k Hr.k jm.s	それにて汝の顔を飾れ
scb.s Tw	それは汝を浄めよう
snTr.s jr.k	その香りは汝の上にある
c snTr jr.t Hrw jr (N)  pn	ホルスの目の香りはこの王に
jdr.s rDw.k	それは汝の流出物を取り去る
d xwj.s Tw m_c ;gb n c n stS	それは汝をセトの腕の汗から守る

(Pyr21)

a h; (.)  pn	おおこの王よ
nxx n.k jr.t Hrw wD;:t xr.k	ホルスの健全な目が汝に属するように
jr.t Hrw wD;:t wD;:tj	ホルスの健全な目は健全である

20aのjw.n.j jn.j n.k jr.t Hrwという結合が、22bおよび69b(ただし、ここは双数である:jr.tj Hrw「ホルスの両眼」)に見られるので、あるいは「私は運んで来た」と訳すべきかもしれない。しかし動詞jwは、jw.n.f xr.k「彼は汝の許に来た」の用例が多い(194b,c;195d;200a,b,c;201b,c,d)程度で、特に助動詞としての用法を指示したり暗示したりする例が他の箇所にも現れるのではない。

## 第30章

(Pyr21)

b Dd\_mdw Hrw jm wsjr (.)|  
 Htm.k m jr.t Hrw  
 m n.k sj

呪文オシリスたる王としてのホルスよ  
 汝ホルスの目を備える  
 汝のためにそれを取れ

## 第31章

(Pyr21)

c Dd\_mdw wsjr (.)| pn  
 mH.n kw Hrw m jr.t.f tm.tj

呪文オシリスたるこの王よ  
 ホルスは汝を彼の完全な目で満たす

## 第32章

(Pyr22)

a Dd\_mdw  
 qbb.k jpn wsjr  
 qbb.k jpn h; (.)|  
 pr.w xr z;.k  
 pr.w xr Hrw  
 b jw.n.j  
 jn.j n.k jr.t Hrw  
 qb jb.k Xr.s  
 jn.j n.k sj Xr kb.wj.k

呪文  
 この汝の冷水はオシリスよ  
 この汝の冷水はおお王よ  
 汝の息子の許へ去った  
 ホルスの許へ去った  
 私は来た  
 私は汝のためにホルスの目を運んだ  
 汝の心はそれにより鎮まる  
 私は汝のために汝のサンダルの下にそれを運ぶ

(Pyr23)

a m n.k rDw pr jm.k  
 N wrD jb.k Xr.s  
 b Dd mdw zp 4  
 m pr.tj n.k xrw  
 WA | snTr\_T; 2 qbb  
 WB | Dj.t qbb mH.t  
 WC | qbb T; 2  
 WD | rDj.t qbb  
 NA | [/////////]  
 NB | Dj qbb Sd mH.t  
 NC | qbb snTr\_T; 2  
 ND

汝から出る流出物を汝のために取れ  
 それにより汝の心は弱らない  
 呪文4回  
 声と共に汝に向かって出るものを取れ  
 塩2塊、冷水  
 デルタの冷水を掛けること  
 冷水、2塊  
 冷水を掛けること  
 [欠損]  
 デルタの池の冷水を掛けよ  
 冷水、塩2塊  
 [欠落]

A837,AはWBとWDの表示が逆転している。

## 文献略号一覧

(引用の際に特記しない限り、\* 印を付けた辞書の数字はページ番号を示し、他は節番号を示す)

- A Allen, J.P., *The Inflection of the Verb in the Pyramid Texts*, Bibliotheca Aegyptia, Vol.2, Malibu, 1984  
 E Edel, E., *Altägyptische Grammatik*, 2 Bde., Roma, 1955-1964  
 FD Faulkner, R.O., *A Concise Dictionary of Middle Egyptian*, Oxford, 1962, (repr. 1964)\*  
 FE Faulkner, R.O., *The Ancient Egyptian Pyramid Texts, translated into English*, Oxford, 1969  
 FPT Faulkner, R.O., *The Ancient Egyptian Pyramid Texts, Supplement of Hieroglyphic Texts*, Oxford, 1969  
 G Gardiner, A.H., *Egyptian Grammar*, 3rd ed., Oxford, 1957(1964, 1966)  
 L Lesko, L.H., *A Dictionary of Late Egyptian*, 5 vols., Providence, 1982-1990\*  
 M Van der Molen, R., *A Hieroglyphic Dictionary of Egyptian Coffin Texts*, Leiden, 2000\*  
 SPT Sethe, K., *Die altägyptischen Pyramidentexte*, 4 Bde., Leipzig, 1908-1922(再版Hildesheim, 1969)  
 SUK Sethe, K., *Übersetzung und Kommentar zu den altägyptischen Pyramidentexten*, 6 Bde., Hamburg, 1935-1962  
 WB Erman, A. u. H.Grapow, *Wörterbuch der ägyptischen Sprache*, 5 Bde., Berlin, 1971\*

## 註

1. 古代エジプトの時代区分は未だ確定していない。ここでは Clayton, P.A., *Chronicle of the Pharaohs*, London, 1994, pp.60, 64に依った。より専門的な文献として、Trigger, B.G. (et alii), *Ancient Egypt: A Social History*, Cambridge, 1983等を参照。Gardiner, Sir Alan, *Egypt of the Pharaohs: An Introduction*, Oxford, 1961(1972)巻末には、マネトン等数種の一次史料に基づくファラオの統治年の対照一覧がある。
2. 以下の文献による。W.R.Dawson & E.P.Uphill, *Who was Who in Egyptology*, 2nd ed., London, 1972のMariette, Brugsh, Masperoの項、Maurizio Damiano-Appia, *Dizionario enciclopedico dell'antico Egitto e delle civiltà nubiane*, Milano, 1996のCairo il Museo Egizio, Marietteの項、SPT(文献略号一覧参照), I, SS.VII-X、Leclant, J., *Les Textes des Pyramides, Textes et langages de l'égypte pharaonique*, Cairo, 1972, II, pp.37-52。
3. Speleers, L., *Traduction, index et vocabulaire des Textes des Pyramides Égyptiennes*, Bruxelles, s.d., 1935-1936; Mercer, S.A.B., *The Pyramid Texts in Translation and Commentary*, 4 vols., New York, London, Toronto, 1952等、Leclant, 註2の上掲論文を参照。
4. SUK(文献略号一覧参照)。最初の212章は訳出されぬまま、一部は没後出版)。FE(文献略号一覧参照)。
5. 屋形禎亮訳「ピラミッド・テキスト」『筑摩世界文学大系1 古代オリエント集』東京1978, pp.579-594。
6. PTには、かつて拙稿(Automated Transcription of Egyptian Hieroglyphic Texts: via transliteration using computer, 佐賀大学文化教育学部研究論文集2-1, 1997, pp.1-40)で考察した書式や方式では処理不能な点があることが判明した。並行本文を表示可能な処理法は、特に必要となった。これらの改善点を盛り込んだコンピュータ処理のための新たな方法については、別稿にて発表予定である。
7. Breasted, J.H., *Development of Religion and Thought in Ancient Egypt*, New York, 1912(1970), p.93。内容から窺うと、インドのヴェーダ文献に類似例を求めることができるのではないだろうか。例えば、針貝邦生『ヴェーダからウパニシャッドへ』東京2000を参照。
8. シュピーゲル(J.Spiegel)説。上記、屋形論文(p.579)参照。
9. E(文献略号一覧参照), I, SS.2-5。

10. SPT, I, S. XI, Leclant, p. 38, FPT. 章(Kapitel)分け自体は既にle comte H. Schack-Schackenbergによって確立されていた。SPT, I, S. X, Leclant, 註2の論文p. 38, n. 2参照。
11. A(文献略号一覧参照), pp. 659-662。
12. SPT, I, S. IX. Leclant, 註2の論文p. 37, n. 1によると、PT発見のきっかけを作ったマリエットはその存在さえ期待していなかったと言う。
13. Allen, T. G., *Occurrences of Pyramid Texts*, Chicago, 1950(筆者未見)。
14. FPT(文献略号一覧参照)。
15. SPT, I, S. XIV。
16. その偏りを特定し難いのは、ピラミッド毎に刻まれた章にもともと取捨選択があったこと、たとえ同一本文が残っていても問題の箇所が欠損しているなどで、使用したか否かを単純に比較できないこと、また、たとえ同一ピラミッドであっても厳密には一貫していないことが、その理由である。例えば第1-71章に掛けてWは一貫してDd-mdwを用いない。これに対し、冒頭部分が欠損しない限りNはほとんどの章でDd-mdwを用いながらも、第26章(19a)と第48章(36b)とでは例外的に用いない。また第82-92章に掛けても、Nがこの定型句を用いるのに対しWは用いないという全般的傾向が同様に認められるものの、第86章ではWが例外的にDd-mdwを用いている。このような例外があるとは言え、Wは用いずTとNとは用いるという傾向は、第142-171章に掛けても指摘できる。第1-500節におけるDd-mdwの出現回数を参考までに示せば、W:86, T:76, P:10, M:10, N:178となる。したがって、Wが全然使用しないとまでは言えないのであるが、その理由は不明である。
17. 行冒頭のDd-mdw zp 4が章冒頭と偶々重なることはある。最初の500節までを例にとれば、35b(第46章), 50b W(第72章), 54c(第79章), 101a(第172章表題), 218a(第141-149章表題) の5箇所がそれである。これに対し、行冒頭のDd-mdw zp 4が章冒頭と重ならない箇所は、12c, 18d W2, 23b, 26fおよび72-100に掛けてのb, d, (f)における n (N) | pn f; t zp 4「王のために4回捧げ持つ」と対になった定型句と217bの全69箇所、行半ばに出現する箇所が16c, 18d W1, 115b, 136a, 221c, 497bの全6箇所である。FEは、章立てのDd-mdwを9節以下では訳出しない方針にも拘わらず、このDd-mdw zp 4だけは、18dを除いて全て訳出している。
18. Silverman, *Divinity and Deities in Ancient Egypt*, in Shafer, B. E. (ed.) *Religion in Ancient Egypt*, Ithaca and London, 1991, pp. 30-58。
19. Silverman, 上掲論文p. 34。
20. Lesko, L. H., *Ancient Egyptian Cosmogonies and Cosmology*, Shafer, 上掲書p. 92。屋形, 註5の論文p. 582に神々の系図がある。
21. (1) 4b, 5b, 57d, 63b, 155b, 220c, c, 255b, 256a, 270c, 323c, 346b, 347b, b, 362b, b, b, 480d; (2) 121b, c, 198d, 251b, 252b, 458a; (3) 134a, 333b, 350b, 475c; (4) 473a; (5) 282c。このうち346aについては、E828が(1)の用例とするのに対し、FEはnjs “summons” と訳す。
22. Shennum, D., *English-Egyptian Index of Faulkner's Concise Dictionary of Middle Egyptian*, Malibu, 1977, p. 24。
23. W35b, W58c, N58c, W59a, N59a, N101b, W219a, N219a, T219a, N223a
24. 註18に同じ。
25. 関根正雄訳『旧約聖書十二小預言書 上』東京1967。
26. Leclant, 註2の論文, p. 45による。SpiegelとPiankoffは入手できていない。